

介護の ゆくえ

期待高まる民間デイサービス

介護の必要な高齢者を少人数受け入れて日中預かる「民間デイサービス」。「宅老所」と名付けている所もあり、改修した民家などを使って家庭に近い環境で自由に過ごしてもらうのが特徴だ。きめ細やかな対応をしやすい、介護保険制度の見直し論議で浮上している「小規模多機能サービス拠点」のイメージにも近い。民間デイの現状と課題を追った。
(小野暁子)

二階建て民家の一階を改修した民間デイサービス「まごのて」(岡山県久野町豊安)の屋下がり。居間には新聞を読む利用者や、ベッドに横になって休んでいる人がいる。「全員で一斉に何か行う日課はない。各自のペースで過ごしてもらっている」と代表の中川浩彰さん(三三)。

三十人が登録し、一日の定員は十人。この日は八人が訪れ、介護職員五人が一对一に近い態勢でかわった。利用者がいすから立ち上がるようにすると、職員がそっと手を伸ばして寄り添う。少人数だからこそ、小回りがよく介護が可能だ。



民間デイサービス「まごのて」では、畳の居間で利用者が職員とおしゃべりを楽しむなど自由に過ごす。それぞれに合ったペースでゆったりとした時が流れる

小回り利き地域密着

利用者主体の制度を

報告書では、小規模多機能サービス

「まごのて」は昨春開設。特別養護老人ホームに七年勤めた中川さんが立ち上げた。それまで、中川さんは定員約五十人のデイサービス担当者の一人。職場から効率化を求められ、利用者の声に耳を傾けることもままならなかったという。

民間デイは、高齢者が住み慣れた環境で暮らせるように「まごのて」の利用者が隣町か、一週間で帰って自宅に戻らないサービスを一体的に行う「泊まる」「住む」といったサービスを、利用者の状態を把握した同じ職員が行うことが望ましいとしている。

地域に根ざした支援を目指す。で一週間で帰って自宅に戻らないサービスは、要介護状態になった高齢者が、片道の所要時間は送迎車でせいぜい十五分。安心を身近に感じられる良さがあがる。

ところが、刻一刻と変化する利用者や家族の状況に十分対応できていない現状も。介護保険制度では、設備や人員の面から小規模な民間デイや宅老所での「泊まり」を認めておらず、利用者はなじみのない施設のショートステイを使わざるを得ないことが多い。

このため、新しい環境に慣れることが難しい痴呆性高齢者は混乱し、状態の悪化を招くケースもある。「まごのて」の利用者で痴呆症状のある女性(六三)は、隣の特別養護老人ホーム

出ようになった。同居する長女(六三)は「母が通い慣れた『まごのて』で預かってもらえたら」と残念がる。

ショートステイの指定基準(利用者一人当たりの床面積一〇・六五平方メートル以上など)は民間デイや宅老所にとりハードルが高く、指定を受けられることは難しい。中川さんは目の前で困っている人がいるのに受け入れられないことにジレンマを感じ、「泊まりができる制度を」と訴えている。

厚生労働省の研究会が昨夏まとめた報告書「二〇一五年の高齢者介護」は、切れ目のないサービス提供に先駆的に取り組んできた。国の方向性が今後示されようとする中、地域に密着して在宅生活を支える民間デイや、宅老所への期待は一層高まるだろう。

インタビュー

国で検討中の「小規模多機能サービス拠点」。岡山県民間デイ連絡会の矢山修一会長(西三ノ井NPO法人高齢者介護研究会のどか宅老所理事長)はどうかと伺っているのか。

◇

「のどか宅老所は介護保険利用者には泊まりが必要に



岡山県民間デイ連絡会・矢山修一会長

「まごのて」は昨春開設。特別養護老人ホームに七年勤めた中川さんが立ち上げた。それまで、中川さんは定員約五十人のデイサービス担当者の一人。職場から効率化を求められ、利用者の声に耳を傾けることもままならなかったという。

民間デイは、高齢者が住み慣れた環境で暮らせるように「まごのて」の利用者が隣町か、一週間で帰って自宅に戻らないサービスを一体的に行う「泊まる」「住む」といったサービスを、利用者の状態を把握した同じ職員が行うことが望ましいとしている。

地域に根ざした支援を目指す。で一週間で帰って自宅に戻らないサービスは、要介護状態になった高齢者が、片道の所要時間は送迎車でせいぜい十五分。安心を身近に感じられる良さがあがる。

ところが、刻一刻と変化する利用者や家族の状況に十分対応できていない現状も。介護保険制度では、設備や人員の面から小規模な民間デイや宅老所での「泊まり」を認めておらず、利用者はなじみのない施設のショートステイを使わざるを得ないことが多い。

このため、新しい環境に慣れることが難しい痴呆性高齢者は混乱し、状態の悪化を招くケースもある。「まごのて」の利用者で痴呆症状のある女性(六三)は、隣の特別養護老人ホーム

出ようになった。同居する長女(六三)は「母が通い慣れた『まごのて』で預かってもらえたら」と残念がる。

ショートステイの指定基準(利用者一人当たりの床面積一〇・六五平方メートル以上など)は民間デイや宅老所にとりハードルが高く、指定を受けられることは難しい。中川さんは目の前で困っている人がいるのに受け入れられないことにジレンマを感じ、「泊まりができる制度を」と訴えている。

厚生労働省の研究会が昨夏まとめた報告書「二〇一五年の高齢者介護」は、切れ目のないサービス提供に先駆的に取り組んできた。国の方向性が今後示されようとする中、地域に密着して在宅生活を支える民間デイや、宅老所への期待は一層高まるだろう。

外部の日で質の評価必要

「まごのて」は昨春開設。特別養護老人ホームに七年勤めた中川さんが立ち上げた。それまで、中川さんは定員約五十人のデイサービス担当者の一人。職場から効率化を求められ、利用者の声に耳を傾けることもままならなかったという。

民間デイは、高齢者が住み慣れた環境で暮らせるように「まごのて」の利用者が隣町か、一週間で帰って自宅に戻らないサービスを一体的に行う「泊まる」「住む」といったサービスを、利用者の状態を把握した同じ職員が行うことが望ましいとしている。

地域に根ざした支援を目指す。で一週間で帰って自宅に戻らないサービスは、要介護状態になった高齢者が、片道の所要時間は送迎車でせいぜい十五分。安心を身近に感じられる良さがあがる。

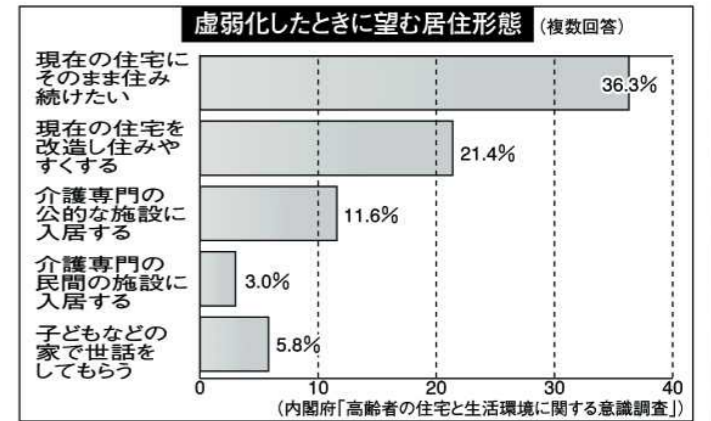
ところが、刻一刻と変化する利用者や家族の状況に十分対応できていない現状も。介護保険制度では、設備や人員の面から小規模な民間デイや宅老所での「泊まり」を認めておらず、利用者はなじみのない施設のショートステイを使わざるを得ないことが多い。

このため、新しい環境に慣れることが難しい痴呆性高齢者は混乱し、状態の悪化を招くケースもある。「まごのて」の利用者で痴呆症状のある女性(六三)は、隣の特別養護老人ホーム

出ようになった。同居する長女(六三)は「母が通い慣れた『まごのて』で預かってもらえたら」と残念がる。

ショートステイの指定基準(利用者一人当たりの床面積一〇・六五平方メートル以上など)は民間デイや宅老所にとりハードルが高く、指定を受けられることは難しい。中川さんは目の前で困っている人がいるのに受け入れられないことにジレンマを感じ、「泊まりができる制度を」と訴えている。

厚生労働省の研究会が昨夏まとめた報告書「二〇一五年の高齢者介護」は、切れ目のないサービス提供に先駆的に取り組んできた。国の方向性が今後示されようとする中、地域に密着して在宅生活を支える民間デイや、宅老所への期待は一層高まるだろう。



6割が在宅生活希望 内閣府調査

要介護状態になっても住み慣れた町で在宅生活を送りたいと願う高齢者は多い。内閣府が2001年、全国の60歳以上の男女3000人(回収率74.2%)に行った「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」によると、虚弱化したときに望む居住形態として、約60%の人が現在の住宅での生活継続を希望している。一方、施設入所を望む人は20%にも満たない。

高齢者がなじみの地域で安心して在宅生活を送るため、切れ目のないサービスの充実が求められている。

意見募る

「介護のゆくえ」は月1回掲載します。感想やご意見をどしどしお寄せください。あて先は〒700-8734、岡山市新屋敷町1ノ1ノ18、山陽新聞社文化家庭部(086-244-3912、ファクス086-246-3218)。メールアドレスは、bunka@sanyo.oni.co.jp